

報告

初年次教育における効果的な教授方法について  
— 医療保健学セミナーにおけるレポートの書き方に関する一考察 —

山崎智代、山崎紀久子、日向野香織

つくば国際大学医療保健学部看護学科

**【要 旨】** 本研究の目的は、看護系大学における初年次教育の一教授内容である「レポートの書き方」の受講後の学生の達成度の変化を報告することである。対象は平成27年度のA大学1年生で、「医療保健学セミナー」を受講した学生のうち、調査研究への同意を得られた42名とした。自作の質問紙で「レポートの書き方」に関して受講後の学生の変化を単純集計した。その結果、質問紙全項目において学生の達成度は、ほぼプラス方向へと変化していた。その中でも、DVD教材の活用や講義内容に関する数値が高値を示していたことから、教材の選択と教授方法の工夫が受講後の学生の達成度を向上させていることがわかった。反対に引用文献・参考文献の書き方は、受講前よりプラスには転じているが、他の項目と比較すると低値であることもわかった。今後、引用文献・参考文献の書き方については、さらに教授方法や指導方法を検討していく必要があることが示唆された。

キーワード：初年次教育，レポート，教授方法，リテラシー

序 論

総務省統計局調査によると、昭和60年度の高等教育機関(大学の学部・通信教育部・別科，短期大学の本科・通信教育部・別科，高等学校・特別支援学校高等部の専攻科への進学率)への進学率は30.5%(男27.0%、女33.9%)、就職率は41.1%であり、進学者より就職者の方が上まっていた。しかし、平成19年度の進学率は51.2%(男50.0%、女52.5%)、就職率18.5%となり、後期中等教育機関修了者の半数が高等教育

機関へ進学する時代へと変化していった(総務省統計局ホームページ)。この頃を境に、高校から大学への学びの円滑な移行がスムーズに行えない現状が各大学において問題として浮上してきた。

中央教育審議会は、「学士課程教育の構築に向けて」で、初年次教育の必要性を提言し、その中で、調査した636学部で重視している教育内容を提示している。その上位5つは、「レポート・論文などの文章技法」「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表技法」「学問や大学教育全般に対する動機づけ」「論理的思考や問題発見・解決能力の向上」の順となっている(中央教育審議会，2008)。

また、文部科学省ホームページにある「大学における教育内容等の改革状況について(概要)」

連絡責任者：山崎智代  
〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33  
つくば国際大学医療保健学部看護学科  
TEL: 029-826-6622  
FAX: 029-826-6776  
E-mail: c-yamasaki@tius.ac.jp

によれば、初年次教育を導入している大学は、2006年度の71%から2012年度は94%に増加している。そして、2012年度の初年次教育の取り組み状況として最も多いのは、「レポート・論文の書き方等の文章作法」であり、初年次教育を実施している大学695大学のうち610大学(88%)が実施している。他には「プレゼンテーション等の口頭発表」は548大学(79%)、「学問や大学教育全般に関する動機付け」が526大学(76%)と続いている(文部科学省, 2014)。

これらを踏まえると、初年次教育において、「レポート・論文の書き方等の文章作法」の育成に力を注いでいる大学が大半であり、その重要性が伺える。しかし、初年次教育におけるレポートや論文などの書き方に限定し実証的に検討した先行研究は少なく、山田は、「初年次教育プログラムは、実証的根拠に基づいて評価・改善が図られているとは言い難い状況にある」と指摘している(山田, 2013)。

A大学看護学科は2009年度以降、初年次教育の位置づけとして「医療保健学セミナー」を開講し、「レポートの書き方・文章読解、文献検索、数的処理、討議法」について、複数の教員で講義と演習が実施され、今年度で6年目となる。野原らは、この取り組みを「看護系大学における初年次教育の授業展開と学生の動機づけの実態」として報告している(野原他, 2014)。筆者らは、2011年度から前任者とともに本科目に携わっており、2014年度からは前任者の意向も引き継ぎつつ、本科目を担当することになった。オムニバス形式ではあるが、「ガイダンスとレポートの書き方」に関しては、主担当として学生に関わった。特にレポートを書く力は、医療系大学において実習記録なども含めレポートを書くことが多く、医療人としても重要かつ必要な能力の一つである。担当するにあたり前任者の教授法と変えた点は、レポートの書き方を講義形式だけで教授するだけではなく、数回にわたり実際に「レポートを書く」演習も組み込み添削指導を行ったことである。授業開始時では、ほとんどの学生が「レポートを書く」こと

に関して苦手意識を持っていたが、講義・演習を積み重ねていくことで、終講時には軽減している学生や、「レポートを書く」ことに好意的な思いを持てるようになった学生が増えており、受講前後の学生の達成度の変化が見て取れた。

そこで本研究では、医療保健学セミナーの授業の中で筆者が主で担当したガイダンスも含め「レポートの書き方」に関する学生への調査結果をもとに、授業展開を振り返りながら学生の達成度の変化をもたせた背景を明らかにし、今後の授業に向けての課題を述べる。

## 方 法

### 科目の概要

「医療保健学セミナー」は、A大学看護学科における初年次教育の科目の位置づけで、1年次前期に2単位(30時間)が組まれている。この科目の内容は、主に大学入学後、スムーズな大学生活へ導入を図れるように、ガイダンス、大学生に必要なレポートの書き方・文章読解、文献検索、数的処理、討議法の5項目である。教授方法は、講義と演習からなり、演習では、実際に提示された資料の読解やDVD鑑賞をもとに各自レポート作成したり、看護師に必要な数的問題を解いたり、グループに分かれ討議の実際などを体験させる。

今回「レポートの書き方」を担当するにあたり、次の3点を考慮した。1点目は、学生がレポートを書くことに対して苦手意識や嫌悪感を増強しないよう導くこと、2点目は、学生がレポートを書くにあたって用いる教材を吟味し選定すること、3点目は、一方通行の講義形式を少なくし、学生が自ら聞く・見る・調べることを通して実際に「書く」という行動を多くしたということである。本研究で示していく「レポートの書き方」については、医療保健学セミナー15回の講義演習のうちガイダンスを含め7回実施した。内容を以下に示す。

まず、初回のガイダンスでは、医療保健学セミナーの全体像を示し、大学での学びについて導入を図った。その際、学生がメモを取りながらガイダンスを聞けるか否か机間巡視をしながら、学生の講義に対する取り組み方に着目し講義を進めていった。ガイダンスにおいては、学生が医療保健学セミナーに興味関心を示せるよう、また、これからスタートする大学での学び方として「自立的学習への道」をメッセージとして朗読し、同時に学生自身が能動的に考えてメモしていくことが重要であることを促していった。

第2回は、「20代でしておくこと」のDVDを鑑賞し、学生は各自サブテーマを設定しレポートを書くということに挑戦した。

ここでは、学生に高校までで既習しているであろう「小論文の書き方」を想起させ、テキストの参照も促し、「まずは書いてみる」ということをさせた。これによって、学生のレポートの仕上がり状況から、現時点での学生の「書く力」のレディネス把握を行った。

第3回は、前回提出済レポートの発表を通して、各自のレポートを振り返る機会とした。前回提出したレポートを学生に返却し、よくできている学生のレポート数名分を発表し、その後、学生のレポートで不適切であった内容について詳細に説明していった。ここでは、学生自らが返却された自身のレポートと講義内容を照合しながら聞けるよう配慮しながら進めていった。

第4回は、学生はテキストを熟読し、各自レポートの書き方のポイントをA3用紙数枚(枚数と書き方は自由)にまとめさせ、学生はオリジナルのマイテキストを完成させ、その工程を通して、「レポートの書き方」について内容を理解するという試みを実施した。

第5回は、「小論文の書き方」のDVDを鑑賞し、小論文の書き方の基本を再認識し、テーマに沿って実際に学生は書いてみるということに挑戦した。DVDの内容をあらかじめ示したレジュメを配布し、学生はレジュメの空欄を埋めながらDVDを鑑賞し知識を得ていくという形式

をとった。この間、小論文の「型」を覚えて実際に問いを立て書いていくという演習も実施している。

第6回と第7回は、今まで学んできた知識を統合し、最終レポート(評価対象となる)を仕上げ提出する段階とした。今年度は、「コミュニケーション」に関する様々な新聞記事(NIE学習=Newspaper In Education)を提示し、その内容をもとに各自レポートのサブテーマを設け、さらに論じていく際に必要な文献も検索し、レポートに反映させ考察したものを提出することを課題とした。

以上の授業概要を表1に示す。

評価の視点は、学生に事前に提示し、学生はレポートとともに自己評価を記した評価表(20点)を添付し提出した。提出されたレポートは、教員が添削し評価表に沿ってレポートの実際として最終評価を出し、レポートは後日学生に返却した。

「レポートの書き方」の最終評価は、前述のレポート点(20点)と知識確認の筆記試験(40点)の合算(計60点)での評価とした。

## 研究対象

平成27年度の「医療保健学セミナー」を履修したA大学看護学科1年生76名のうち、アンケート回収数は50名(回収率68%)、そのうち研究協力に同意が得られた42名(同意率84%)を対象とした。

## 研究方法及び分析方法

医療保健学セミナー全授業終了後に、自作の質問紙(図1)を用い調査を実施した。質問は、①レポート作成に必要な体裁(句点・読点・段落・「てにをは」・接続詞)がわかる、②序論・本論・結論についてわかる、③引用文献・参考文献の書き方についてわかる、④テーマ・サブテーマについてわかる、⑤レポート作成に対して興味・関心をもてたと思う、⑥レポート作成

表1. 授業概要 (レポートの書き方)

回	学習内容・到達目標	方法	教材
1	科目の目的と授業の進め方について説明を受け理解する。有意義な大学生生活をおくることを意識化する。	講義	プリント
2	DVDスーパープレゼンテーション「20代でしておくこと」を鑑賞し、自己の大学生生活の目標を明確化しレポートを書く。	講義 個人ワーク	DVD「20代でしておくこと」・初回の提出レポート
3	学生数名のレポート (前回提出済みレポート) の発表、およびその発表を通して、各自自身のレポートを振り返る機会とする。	講義	前回提出課題レポートの振り返り、テキスト
4	テキストを熟読し、各自レポートの書き方のポイントをまとめ、その内容を理解する。	個人ワーク	テキスト
5	DVD「小論文の書き方」を鑑賞し、小論文の書き方の基本を再確認し、テーマに沿って実際に書いてみる。	講義 個人ワーク	DVD「小論文の書き方」
6	新聞記事 (NIE) または文献を通して、そこに示された内容を探求し、自己の考察を深めレポートにまとめる。	個人ワーク	新聞記事・参考文献・テキスト
7			

の講義で習ったことが今後の役に立つと思う、⑦ガイダンスを通してセミナーでの学びや大学で学ぶということについてイメージがついてよかった、⑧講義内容がわかりやすかった、⑨DVD(20代にやっておくべきこと)を視聴してよかった、⑩DVD(受験の花道・論文作成)を視聴してよかった、⑪テキスト(レポートの書き方)がわかりやすかった、⑫教員のレポートへの個別添削が役にたった、⑬講義中の教員からの個別指導が文章作成に役にたった、⑭レポートを書くことについて以前より自信が持てるようになった、の14項目とした。質問紙は、各質問項目に対して、講義受講前の自分を「0」として「わかる・思う」の+5段階と「わからない・思わない」の-5段階の計11段階とし、該当数字に丸をつけるという方法(リッカート法)をとった(図1)。尚、数値は受講前の自分を「0」とし、ややよかった「3」、とてもよくよかった「5」、ややわからなかった「-3」、全くわからなかった「-5」と意味づけた。

分析は、統計ソフト IBM SPSS statistics23にて単純集計を行った。

アンケートは、全ての授業が終了した授業最終日の授業終了後、口頭にて質問紙の上部に記

載している文章内容を用いて、研究目的、必要性、方法等を説明し、さらに本人の自由意思による同意であること(同意の有無は、文章中に丸を記載する欄を設けた)、同意を得られない場合でも不利益を被ることがないこと、成績や評価には無関係であることを説明して配布した。回収は、配布当日以降、7日間の猶予があることを告げ、最終回収期限は配布当日から1週間とした。

#### 倫理的配慮

アンケートの結果は、研究以外の目的で使用しないこと、成績・評価とは全く関係がないこと、プライバシー保護と匿名性の確保、研究協力の中断の保障、データの管理方法、研究協力の有無が成績に関係しないことを口頭で説明し、同様の文書と同意書を配布し、同意が得られた学生の質問紙のみを分析対象とした。

また、収集したデータは、学科事務室の鍵付きロッカーに保管し、集計後のデータはUSBへ保存保管し、学外への持ち出しは禁止とした。データの保存期間は、研究終了後5年間としその後は破棄する。

質問項目	← 受講前 →										
	わからない・思わない					わかる・思う					
①レポート作成に必要な体裁(句点・読点・段落・「てにをは」・接続詞)がわかる	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
②序論・本論・結論についてわかる	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
③引用文献・参考文献の書き方についてわかる	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
④テーマ・サブテーマについてわかる	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
⑤レポート作成に対して興味・関心が持てたと思う	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
⑥レポート作成の講義で習ったことが今後の役に立つと思う	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
⑦ガイダンスを通してセミナーでの学びや大学で学ぶということについてイメージがついてよかった	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
⑧講義内容がわかりやすかった	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
⑨DVD(20代にやっておくべきこと)を視聴してよかった	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
⑩DVD(受験の花道・論文作成)を視聴してよかった	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
⑪テキスト(レポートの書き方)がわかりやすかった	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
⑫教員のレポートへの個別添削が役に立った	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
⑬講義中の教員からの個別指導が文章作成に役に立った	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5
⑭レポートを書くことについて以前より自信が持てるようになった	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5

注：基準は、受講前と変わらない場合「0」、ややわかるを「3」、とてもよくわかるを「5」、ややわからないを「-3」、全くわからないを「-5」とする

図1 アンケート内容一覧

本研究は、研究者の所属機関において倫理委員会の承認を得た(平成27年度、第26-15)。

## 結果

50名の学生から回答があり(回収率68%)、このうち研究協力の同意が得られた42名(同意率84%)を分析した。その結果を以下に記述する。

「レポート作成に必要な体裁(句点・読点・段落・「てにをは」・接続詞)がわかる」で一番多かったのは、4の16人(38.1%)、次に多かったのは3の15人(35.7%)、2が6人(14.3%)、5が5人(11.9%)、平均値は3.48であった。

「序論・本論・結論についてわかる」で一番多かったのは、4と3で共に12人(28.6%)、次に多かったのは5の9人(21.4%)、2が7人(16.7%)、1が2人(4.6%)、平均値は3.45であった。

「引用文献・参考文献の書き方についてわかる」で一番多かったのは、3の12人(28.6%)、次に多かったのは4と2で共に10人(23.8%)、1

が5人(11.9%)、5が4人(9.5%)、0が1人(2.4%)、平均値は2.88であった。

「テーマ・サブテーマについてわかる」で一番多かったのは、5の12人(28.6%)、次に多かったのは4の10人(23.8%)、3が9人(21.4%)、2が8人(19.0%)、1と0が共に1人(2.4%)、無回答1人(2.4%)、平均値3.51であった。

「レポート作成に対して興味・関心がもてたと思う」で一番多かったのは、4と3で共に14人(33.3%)、次に多かったのは2の6人(14.3%)、5が5人(11.9%)、1と-1が共に1人(2.4%)、平均値は3.29であった。

「レポート作成の講義で習ったことが今後の役に立つと思う」で一番多かったのは、5の26人(61.9%)、次に多かったのは4の9人(21.4%)、3が7人(16.7%)、平均値は4.45であった。

「ガイダンスを通してセミナーでの学びや大学で学ぶということについてイメージがついてよかった」で一番多かったのは、4の14人(33.3%)、次に多かったのは5の13人(31.0%)、「3」が12人(28.6%)、2が2人(4.8%)、1が1人(2.4%)、

平均値は3.86であった。

「講義内容がわかりやすかった」で一番多かったのは、5の17人(40.5%)、次に多かったのは4の13人(31.0%)、3が8人(19.0%)、2が3人(7.1%)、1が1人(2.4%)、平均値は4.00であった。

「DVD(20代にやっておくべきこと)を視聴してよかった」で一番多かったのは、5の29人(69.0%)、次に多かったのは4の8人(19.0%)、2が3人(7.1%)、3が2人(4.8%)、平均値4.50であった。

「DVD(受験の花道・論文作成)を視聴してよかった」で一番多かったのは、5の25人(59.5%)、次に多かったのは4の12人(28.6%)、3と2が共に2人(4.8%)、無回答が1人(2.4%)、平均値は4.46であった。

「テキスト(レポートの書き方)がわかりやすかった」で一番多かったのは、4の20人(47.6%)、次に多かったのは5の10人(23.8%)、3が9人

(21.4%)、2が2人(4.8%)、-1が1人(2.4%)、平均値は3.81であった。

「教員のレポートへの個別添削が役にたった」で一番多かったのは、4の17人(40.5%)、次に多かったのは5の11人(26.2%)、3が10人(23.8%)で、2が4人(9.5%)、平均値は3.83であった。

「講義中の教員からの個別指導が文章作成に役にたった」で一番多かったのは、4の16人(38.1%)、次に多かったのは3の12人(28.6%)、2が5人(11.9%)、5が4人(9.5%)、1が3人(7.1%)、0が1人(2.4%)、無回答が1人(2.4%)、平均値は3.24であった。

「レポートを書くことについて以前より自信が持てるようになった」で一番多かったのは、3の14人(33.3%)で、次に多かったのは4の13人(31.0%)で、2が5人(11.9%)、5が4人(9.5%)、1が3人(7.1%)、-1が2人(4.8%)、無回答が1人(2.4%)、平均値は3.05であった。

以上の結果を表2に示す。

表2. アンケート結果一覧

質問項目		← 受講前 →											平均値	標準偏差		
		-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5			未記入	
①レポート作成に必要な体裁(句点・読点・段落・「てにをは」・接続詞)がわかる	人数	0	0	0	0	0	0	0	6	15	16	5	0	3.48	0.89	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	35.7	38.1	11.9	0.0			
②序論・本論・結論についてわかる	人数	0	0	0	0	0	0	2	7	12	12	9	0	3.45	1.15	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8	16.7	28.6	28.6	21.4	0.0			
③引用文献・参考文献の書き方についてわかる	人数	0	0	0	0	0	1	5	10	12	10	4	0	2.88	1.25	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	11.9	23.8	28.6	23.8	9.5	0.0			
④テーマ・サブテーマについてわかる	人数	0	0	0	0	0	1	1	8	9	10	12	1	3.51	1.30	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	2.4	19.0	21.4	23.8	28.6	2.4			
⑤レポート作成に対して興味・関心が持てたと思う	人数	0	0	0	0	1	0	1	8	14	14	5	1	3.29	1.19	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	0.0	2.4	14.3	33.3	33.3	11.9	2.4			
⑥レポート作成の講義で習ったことが今後の役に立つと思う	人数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	9	26	0	4.45	0.72
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	21.4	61.9	0.0		
⑦ガイダンスを通してセミナーでの学びや大学で学ぶということについてイメージがついてよかった	人数	0	0	0	0	0	0	1	2	12	14	13	0	3.86	1.00	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	4.8	28.6	33.3	31.0	0.0			
⑧講義内容がわかりやすかった	人数	0	0	0	0	0	0	1	3	8	13	17	0	4.00	1.06	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	7.1	19.0	31.0	40.5	0.0			
⑨DVD(20代にやっておくべきこと)を視聴してよかった	人数	0	0	0	0	0	0	0	3	2	8	29	0	4.50	0.89	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1	4.8	19.0	69.0	0.0			
⑩DVD(受験の花道・論文作成)を視聴してよかった	人数	0	0	0	0	0	0	0	2	2	12	25	1	4.46	0.81	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8	4.8	28.6	59.5	2.4			
⑪テキスト(レポートの書き方)がわかりやすかった	人数	0	0	0	0	1	0	0	2	9	20	10	0	3.81	1.11	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0	4.8	21.4	47.6	23.8	0.0			
⑫教員のレポートへの個別添削が役に立った	人数	0	0	0	0	0	0	0	4	10	17	11	0	3.83	0.94	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.5	23.8	40.5	26.2	0.0			
⑬講義中の教員からの個別指導が文章作成に役に立った	人数	0	0	0	0	0	1	3	5	12	16	4	1	3.24	1.18	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	7.1	11.9	28.6	38.1	9.5	2.4			
⑭レポートを書くことについて以前より自信が持てるようになった	人数	0	0	0	0	2	0	3	5	14	13	4	1	3.05	1.40	
	%	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8	0.0	7.1	11.9	33.3	31.0	9.5	2.4			

注：基準は、受講前と変わらない場合「0」、ややわかる「3」、とてもよくわかる「5」、ややわからない「-3」、全くわからない「-5」とする。

## 考 察

### DVD教材の選定と活用の効果

今回の調査で「DVD(20代にやっておくべきこと)を視聴して良かった(4.50)」「DVD(受験の花道・論文作成)を視聴して良かった(4.46)」は、ともに平均値が4以上を示し、前者は5と回答した学生が69.0%、後者で5と回答した学生は61.0%であった。この結果からも、学生にとって教材として用いた DVD 視聴は、効果的であったと評価できる。

DVD「20代にやっておくべきこと」は、大学に入学して間もない学生が、これからの自分を見出していく手助けになるように、アメリカ合衆国の大学生の現状を映し出し、20代を充実させるか否かが今後の人生を大きく左右することを啓発する内容のものであった。そこにはまさにこれから学生が経験するであろう身近な世界が示されていた。これから大学生活を送ろうとしている学生にとって、この時期にこの DVD を視聴したことは、学生に大きな影響を与えたと同時に、学習への動機づけにもなり効果的であったと考える。この現状を見て知って書かれた学生のレポートには、「人生を決めるのは今という言葉に、はっとさせられた」「20代という時期が人生において重要」「将来とともに今の自分の事も考えさせられるビデオだった」「大人になるための大切な時期の20代を無駄にしないように生きていきたい」「今までの行動、考え方を改めるよい機会となった」などの意見が記されていた。これらの意見を踏まえると、学生は、このアメリカ合衆国の学生の姿を見て、他人ごとではないという思いにかられ、これからの大学生活の過ごし方に対して真摯に向き合い、考えていかなければならないことを痛感しているのではないかと。そして多くの学生が、これからの大学生活をどのように送るべきかを DVD の視聴によって示唆されていた。本教材を用いたことで、学生は自分自身の大学生活に対して思い描く機会を得ることができたと同時に、学生

の身近な問題をレポートに書くという点で、教材として活用したことは効果的であったと考える。

また、2本目の DVD「受験の花道・論文作成」を教材として用いた背景には、高校時代に小論文の書き方指導を十分に受けていない学生が存在していること、また、提出された学生のレポートを読むごとに、レポートは自分の心に浮かんだことを書けばよいと誤解している学生が多いことを、常日頃から感じていたからである。現に、本初講義時に高校までに小論文の書き方指導を受けた学生に挙手を求めたところ、10人にも満たない数であった。これらのことも考慮し、小論文の書き方を大学受験対策としてわかりやすく説明している DVD を選定して取り入れた。そして、DVD で示された小論文の「型」に沿って書いてみるという演習を行ったことで、書くことに対する苦手意識を払拭することができた学生もいた。この「型」には、自ら問いを立て考えることも示されており、それに沿って実際に学生も書くという演習を試みた結果、学生は「型」に入れて書けるようになっていった。演習中の学生の声としても、「型に沿って書いていくと従来よりも書けるようになってきた」「書くことが楽しくなってきた」「もっと早く知りたかった」等という意見が多数聞かれた。樋口は、推薦入試や社会人入試では、小論文が主役であるにも関わらず、「小論文とは何かを理解されていないのではないだろうか。多くの人が、小論文とは何か、正体をつかめずにいる。高校までの授業には小論文という科目はない」ことを指摘している(樋口, 2006)。そして「論理的に思考するための最大のコツ、それは『型』を決めて、そのとおりに書いていくことだ」と断言し、その手順を示している。

児玉も「大学受験で小論文を学んできた学生でさえも『小論文とはどのような文章なのか』と聞かれて、明確な答えが返って来ることはない。大学受験で小論文を学んできた学生は、小論文とはどのような文章なのかを考えずに、小論文で点数を取るためには、ただ時事問題に関

する『知識』を蓄えることが必要であると、考えているようである」と指摘し、さらに「小論文とは、第一に《問い+答え》の型をとった文章であることから始まる。論文とは、『問い』に対する『答え』としての自分の『考え』を述べる文であり、『心に浮かんだこと』をそのまま書くものではない。『心に浮かんだこと』をそのまま書き留めた言葉は、文章としては適切でも、小論文としては、不適切である」と述べている(児玉, 2014)。これらを踏まえると、DVD「受験の花道・論文作成」を教材として用い、そこからの学びを生かして学生が「問い」を立て自分の意見を書くという演習を取り入れたことは、理に当たっていたと考える。

また、杉谷は「自ら『問い』『考える』という姿勢を重視するような試みや教材は、いまだ限られているように見受けられる。担当教員からは、レポートや論文の雛形を教えることはできても、学生が自分で問題を見つけられるように指導することは難しいといった声も聴かれる」と述べている(杉谷, 2009)。このように、学生自らが「問い」「考える」ということを促していく教材を見出すことは困難である。このことを考慮すると、今回使用したDVD教材を見出せたことは良かったと同時に、学生の学びに大きく影響したといっても過言ではない。適切な教材を選定することが、学習効果を向上させるうえで重要であると考えられる。

#### レポートの書き方作法に関する学生の達成度

「レポート作成に必要な体裁(句点・読点・段落・「てにをは」・接続詞)がわかる」では、3以上と回答した学生が36人(85.7%)で平均値は3.48、「序論・本論・結論についてわかる」は、3以上と回答した学生が33人(78.6%)で平均値は3.45、「テーマ・サブテーマについてわかる」では、3以上と回答した学生が31人(73.8%)で平均値は3.51であったが、0と回答した学生が1人(2.4%)いた。前述の3項目においては、今回の講義や演習で75%前後の学生が受講前と比

較して高値を示していることから、学生の各項目に対する達成度が高いことは読み取れる。ただ、この数値は実際にレポートが正しく書けるようになっていることを示すものではないことを念頭に置く必要がある。個々の学生の達成度の高低と実際のレポート評価の高低を比較するには、個々のレポート評価項目の点数と照合してみないと判断できない。無記名での調査回答では得ることができないのが現状である。

牧野は、学習調査状況を記名式調査で実施する場合、回答内容の信憑性に問題があるという見方に対して、授業の単位認定者による授業評価質問紙調査の場合でも、授業内容評価、教員評価、授業方法評価、総合評価、満足度、相対的な総合評価、自己評価のいずれについても、記名式の授業評価の結果と無記名式の授業評価の結果の間には差がないことを明らかにしている(牧野, 2004)。このことを考慮すると、先に述べた個々の学生の達成度の高低とレポート評価の高低を比較し、両者に相関関係があるか否かを、今後検討することも不可能ではないことが示唆された。

次に、最も低い平均値2.88を示した「引用文献・参考文献の書き方についてわかる」について考察したい。

この項目では、3以上で回答した学生が26人(61.9%)、1が5人(11.9%)、0が1人(2.4%)であった。他の質問項目に比べ、低い点数をつけている学生が多かった。授業の中で、学生から提出された最初のレポートを添削した結果、ほとんどの学生がうまく文献の引用表記ができていなかった。これは、講義の中で、高校までに引用文献について学習したことがあるか否かを学生に問い挙手を求めたところ、学習している学生は数名のみであった。引用表記がうまくできない現状には、このような背景があったことも関係していると考えられる。その現状を把握したうえで、さらに講義の中で、引用文献に関して例を挙げながら、具体的な引用の仕方および表記の仕方について説明を追加した。より理解を深めたいと願う学生は、受講後も質問に

来る者も見受けられた。しかし、限られた授業時間内だけで引用の仕方を理解し、適切に表記できるようになることは、高校までに学習したことのない学生にとって、非常に難易度の高いものであったと考える。引用も含め文献の扱い方・表記の仕方については、実際にレポートや論文を書く際に用いていくことで、次第に身につけていくものではないかと考える。これは、レポートの書き方を受講してすぐに修得できる内容ではなく、あくまでも現時点では、引用の仕方を知り、書いてみる段階であり、むしろ受講後、様々な授業において提出を求められるレポートの積み重ねによって、修得されていくスキルであると考えられる。

牧も、本文中の引用の注記やレポート末尾への引用文献の記入ができない学生や、意味もわからないまま書いている学生がいることを指摘したうえで、「レポートにおける主体(筆者である学生自身)と他者(調べた本の筆者や書かれている対象者)と区別して表現する難しさが想像できる。『資料テキストを取り込みながら検証・説明できる自己』を鍛えるには、大学1年生ではかなり困難であり、学年が進むなかで、さらに育てていく必要がある」と述べている(牧, 2012)。

以上を踏まえ、引用文献・参考文献の書き方については、大学4年間を通して学科全体で、そのつどフォローしていく必要があることが示唆された。

#### 教員からの指導による達成度

質問紙の回答で最も平均値が高値だったのが、「レポート作成の講義で習ったことが今後役に立つ(4.45)」「講義内容がわかりやすかった(4.00)」であった。

西垣は、「大学に入学した学生にとって、レポートを書くという作業は悩ましいものである。レポートは入学以前に彼(彼女)らが書いてきた文章とは質の異なる文章であり、どのように書けばよいのか戸惑う学生は多い」と述べている(西垣, 2012)。同様な意見は、学生の初回講義

終了後のリアクションペーパーからも伺えた。書くということに対し、苦手意識を持っている学生が多かった。と同時に、レポートを書くことが初めてであるという学生がほとんどであった。

この現状について藤木は、「日本の初等中等教育カリキュラムにおける作文教育の特徴は、学校行事を通じた心の成長を描く行事作文と、課題本の主人公に共感することで自己変革を遂げる読書感想文が主流であること。指導に際し、特定の文章規範(=型)を正式に教えることなく、よい作文とは『子供の気持ちが生きて書きかれているものだ』とされている」とし、さらに「文章を論理的に組み立てていく技法や説得力のある文章に必要な『型』の習得が後回しになっている」と述べている(藤木, 2011)。以上を踏まえたうえで、今回「レポート作成の講義で習ったことが今後役に立つ(4.45)」「講義内容がわかりやすかった(4.009)」の達成度が高得点であったことは、今回の講義・演習は学生にとって意義深いものであったのではないかと考えられる。教員は学生のレポートの書けなさを嘆くのではなく、「レポートの書き方」の終講後も継続して教え続けていくことが肝要であることが示唆された。

「教員のレポートへの個別添削が役にたった」では、3以上を付けた学生が38人(90.4%)、平均値3.83であった。レポートの個別添削は、8人の教員で分担し2回実施した。各教員から出された1回目の添削結果をもとに、講義で振り返り説明し、学生全員で不備な点や個所を共有した。その上で、2回目(最終)のレポートを提出させ、再度個別添削指導を実施した。学生の取り組み方は様々で、1回目の添削を忠実に理解し改善された最終レポートを提出する学生がいる一方で、最終レポートでも前回と同様に指摘を受けるようなレポートを提出する学生もいたのが現状である。改善傾向の見られた学生の達成度は高かったのではないかと推察できる。

「講義中の教員からの個別指導が文章作成に役にたった」では、3以上を付けた学生が32人

(78.0%)であったが、0と無回答を付けた学生が1人ずつおり、平均値は3.24であった。レポートを書く演習中、教員が机間巡視し、その都度質問に応じ書き方を助言したことは、効果的であったと考える。今後も、机間巡視しながら、より多くの学生に声掛けをするなど心がけていきたい。

#### テキスト活用の達成度

テキストは、看護学生を対象に書かれているものを前任者から引き継ぎ使用している。レポートの書き方のポイントがわかりやすくまとめられており、使いやすいテキストである。

「テキスト(レポートの書き方)が分かりやすかった」の学生からの回答は、3以上が39人(92.9%)と高値を示している。しかし、-1と回答した学生が1人(2.4%)いた。

全学生が「マイ テキスト作成」と題して、テキストを参照しながら、自分だけのオリジナルノートを作成したことで、よりテキストの内容理解が進んだのではないかと考える。学生は、独自性のあるノート作りに励みノートを提出した。教師主導の講義を受け身で聞くという形式ではなく、各自が能動的に取り組まなければ成立しない演習形式をとったことで、学生はテキスト全体を熟読する結果となり、テキストを十分に活用できたのではないかと考える。それは、定期試験で実施したテキストの知識確認試験の結果が高かったことから伺うことができる。

高橋らはテキスト使用の利点として、「レポート学習に関して一定の蓄積のある著者らによって一貫してまとめられているものを、共通の尺度として使用することにより、プログラムの目標が揺らぐことを予め防止できる、予習・復習のやりやすさや課題の到達地点に対するイメージのしやすさといったアクセスのしやすさがある、教員にとっても学生にとっても学習効率が高く、教員間の合意形成の成立も促す」と述べている(高橋他, 2010)。

今回のレポート添削なども複数の教員で分担

しているため、軸となるテキストがあることで、同じ視点で指導ができるという効果が得られたと考えられる。

#### 「レポートの書き方」を受講した学生の達成度

質問の「レポートを書くことについて以前より自信が持てるようになった」に対する回答は、3以上が31人(75.6%)であった。

初講時には、苦手意識の強かった学生が多数であったことを考慮すると、本講義ならびに演習は、学生にとって学びがあり、有意義であったことを示唆していると考ええる。しかし、-1を示した学生が2名、無回答が1人存在していることも忘れてはならないと考える。どの学生の回答なのか知ることはできず、理由を確認することはできないが、レポートを書くこと自体の苦手意識が拭えなかったのかもしれない。これからの大学生活の中で、現時点よりは、達成度が向上していくことを願いたい。

#### 研究の限界と今後の課題

今回の研究における限界は、一大学の初年次教育に位置付けられた医療保健学セミナー内で行われている「レポートの書き方」を受講して、学生の達成度に変化をもたらせた背景を明らかにしたものであるが、今回は対象者数が少なく結果を一般化するには限界がある。そして、医療保健学セミナーは、複数の教員によってレポート添削指導を実施しているため、指導内容に若干の違いが生じることは否めない。さらに、今回は受講前のアンケート調査は実施せず、受講後のみアンケート調査を実施したため、アンケートの結果の妥当性にやや欠けてしまった。より妥当なものにするためには、受講前と受講後にアンケートを実施し比較検討する必要がある。今後の課題としては、受講前もアンケートを実施し、受講後との比較結果を明確にすると同時に、アンケートに記した理由なども明記する欄を設け、妥当性を高めていきたい。

また、1年次の調査だけでなく、4年次でさらにどの程度、達成度に変化が生じているかを追跡調査し、継続的な学習指導があったか否かなども含め注目していきたい。また、個々の学生の達成度の高低(自己評価)とレポート評価の高低(教員評価)間に相関関係があるか否かも明らかにしていきたい。

## 結 論

A大学看護学科の初年次教育における「レポートの書き方」に対する学生の達成度の変化をもたらした背景を明らかにすることを目的に調査した結果、以下のことが明らかになった。

1. 初講時に本学習に対する動機づけができるか否かが肝要である。
2. 学生のレディネスを考慮した教材の選定と活用が重要である。
3. 活字離れしている学生に DVD 教材を用いた「レポートの書き方」の学習方法は有効である。
4. 授業を受けて理解したことをもとに、レポートとして実際に書き表すことは難しく、教員による手間をかけての添削や、繰り返しの指導が終講後も必要であることが示唆された。
5. 学生が能動的に学習する仕組み作りが有効であったことが示唆された。

## 謝 辞

本研究において、調査に協力して下さった学生の皆様に感謝申し上げます。

## 参考文献

児玉英明 (2014) 「問う力・書く力」を鍛える教養教育. 平成25年度 人文・社会系科目担

当者会議報告. 第3回共同化科目担当者会議. pp.72-82.

杉谷祐美子 (2009) 「問い」を進化させるレポートライティング教育の試み. アルカディア学報(教育学術新聞掲載コラム). No.387. <https://www.shidaikyo.or.jp/rriihe/research/arcardia/0387.html> (閲覧日: 2015年9月3日)

総務省統計局「進学率と就職率」ホームページ. <http://www.stat.go.jp/data/nihon/zuhyou/n152201100.xls> (閲覧日: 2015年9月13日)

高橋伸一, 鈴木堅弘, 五十嵐有美子, 小林千夏, 江口英子 (2010) 初年次演習におけるレポート学習プログラム実践報告. 京都精華大学紀要. 36:238-253.

中央教育審議会 (2008) 学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ). [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf) (閲覧日: 2015年8月30日)

西垣順子 (2012) 学士課程学生に対する先行研究の引用に関するレポート指導授業の開発とその効果に関する検討. 大阪市立大学『大学教育』. 10(1):1-12.

野原真理, 遠藤由美子, 山崎智代, 山口絹世, 田中厚子, 若林千鶴子, 三浦幸, 日向野香織, 浦山修 (2014) 看護系大学における初年次教育の授業展開と学生の動機づけの実態. 医療保健学研究. 5:141-157.

樋口裕一 (2006) ホンモノの文章力—自分を売り込む技術. 集英社新書.

藤木剛康 (2011) 日本の作文教育の問題点とライティング・センター—和歌山大学経済学部の記事作成指導はいかにあるべきか—. 和歌山大学経済学会『研究年報』. 15:109-118.

牧恵子 (2012) 愛知東邦大学「東邦基礎」における初年次教育の課題. 東邦学誌. 41(1): 169-192.

牧野幸志 (2004) 評価懸念が学生による授業評価に与える影響(2)—授業者担当者への評価懸念のある場合. 高松大学紀要. 41:75-85.

文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進  
室（2014）大学における教育内容の改革状  
況について（概要）．[http://www.mext.go.jp/a\\_](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afielldfile/2015/03/26/1353488_1.pdf)  
[menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/afie](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afielldfile/2015/03/26/1353488_1.pdf)  
[ldfile/2015/03/26/1353488\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afielldfile/2015/03/26/1353488_1.pdf)（閲覧日：

2015年8月30日）

山田礼子（2013）日本における初年次教育の動  
向—過去，現在そして未来に向けて．初年  
次教育学会編，初年次教育の現状と未来．  
世界思想社．pp.11-27.

## Report

# Effective teaching methods for the first-year education: A study on the methods of writing a report in the Health Science Seminar

Chiyo Yamazaki, Kikuko Yamazaki, Kaori Higano

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tsukuba International University

## Abstract

This study aimed to report changes in students' achievement level after participating in a class on "methods of writing a report" which is offered to first-year nursing students. Of the first-year students who entered A University in 2015 and attended the "Health Science Seminar", 42 students who agreed to participate in this study were enrolled as the study subjects. Changes in students' achievement level after attending the "methods of writing a report" class were investigated using an originally developed questionnaire, and the results were collated. As the results, students' achievement level improved in all questionnaire items. Among them, the use of DVDs as educational material and lecture contents showed a high score, indicating that the selection of useful study materials and improvement of teaching methods increased students' achievement level after the class. However, the increase in the score for methods of writing citations and references was not significant compared to other items, suggesting the need to further examine teaching and instruction methods concerning this item.

**Keywords:** First year education, Report, Teaching method, Literacy